

十日自ぬきぬりてぬく結ぶ ○二月廿二日重徳方子より五百奉出忌

○二月十八日より五月廿八日まで浅草より親世名寄帳 貞享三年より廿三年因あり

○二月十三日安後東野卒 号本壁林仁堂三十七才あり楊協福其子虎山著

○江戸町火消い方は組よりまる ○五月浅草より本堂修葺十万人

撰始 月六年五月小 ○浅草法蓮寺の第六天社今年災ふ罹り今の

地へ入る ○九月朝鮮人本陣 正徳供致申副使黄階後事東明寺ありは務初末本籍ありは朝鮮人曲ると

○九月十日 韓人遣 幸町家院をよりお火事八丁

坊辺野焼 ○十月村吉島町本座又七と云りの赤川宿の町人をより

らひ所殿山の上りより小探せ居を元とる 辰登八言五場名歌あり同十八のより二月の男無りせ

○十二月九日能入天姥松隣卒 号五吾居村町新光昭子小葉也

享保五年 庚子

二月廿五日婿ぬれ大お孫大雲と焼亡 おわさか

○二月廿七日午半刻流島町よりおと南風烈々々より町日本橋

を伝る町を喰町を越神田辺和泉橋下管上殿坂本合杉其の端

をより通る ○上野二五門法蓮立

○七月廿二日儒師中村梅謙卒 五十四才名鑑善 浅川要澤より著

○八月園東波あり ○八月町火消の纏りより組の方城を元とる

長七尺の吹流を中又提を元とる おんげを副由

○八月十八日儒師務原梅秋卒 号梅亭 合年の男 ○九月十日大風

○今年冬冷泉中納言為徳江法系向あり鳴高女伝遍出あり

ふりあき

○洞房澤電燈寫本 乃乃及於編 板中の元文三年之

○吉系丸鑑六冊成 乃乃及於編 板中の元文三年之 謀非他と云

享保六年 辛丑 七月

正月八日昼時時是後町よりお火あふ火大風通き丁目より系橋  
本材本町八丁堀本橋町後炮海築地靈巖寺銀町まで焼く

○二月二日辰午刻之河町に丁目裏町よりお火あふけ神田を丁目  
上流に東門焼滅す町に皆まて焼亡

○二月四日己刻之身込込納戸町よりお火あふ日向小石川辺一系小燈  
白山の辺より二橋よりあり日暮里まで焼く此時傳通院へ逃入焼  
死する者二百八拾餘人 一基の橋をこえ 乃乃及於編 板中の元文三年之 築土八幡宮白山社も時  
焼く傳通院災後敷者皆房澤澤子意く法再興あり

○同寺前よりお火消在安小川町へ引りこらり

○二月十五日金曜工柵川改次率 柵川の 祖より

○二月廿日水府彦治傳医吉田林彦率 公十七才年中大檢と云 乃乃及於編 板中の元文三年之

○二月十二日水府彦治傳医吉田林彦率 号 備録

○二月法社の祭禮の時彦彦と名つけたる物をあはれし法彦あり

○五月神田橋法門初め於る古林見宜醫者著講法始 法彦 融文

○六月十二日 三十七日 茶人懸宗知率 号 備録

○書物圖書定る 乃乃及於編 板中の元文三年之 ○六月二日傳作腹於保庸率 乃乃及於編 板中の元文三年之

○七月廿一日藪町八丁目通より妻に十は女會所同率小痛合利  
をかひ新町小町のいへ又一顆をかひ翌年壬寅六月朔日其合  
又一顆をかひと云小室金丸奉以里中の人皆泣く觀と云



○小石川清草堂を不養せり所建十二月より貧困の病を治めり  
はらの板を割刻板のひらきをとり後上原を板と  
 り記名人は通院を恒居の医師小川を取と云ふ

享保八年 癸卯

二月十六日赤坂傳了町より火火為如風烈やく其病の久保延焼了  
 武蔵方町を額焼駈り ○二月十五日より三日のり中村勘三郎  
あんち ちんて  
 芝居百奉の奉祝云彩後夜を大数様若大名等を興行に

○二月廿二日水木玄龍卒 七十四才文山の兄龍也也

○二月廿九日能人志村玄倫卒 六十三才

○三月十九日折奉人磨千奉忌 二月廿日自負五折奉社へ  
 三徳橋を大照部と遷せり

○元禄銀室水銀中銀之ッ室銀印の室銀通用止

○五月十日新井明卿卒 白二男 孫傳為法法  
 被譽中三徳子也

○六月陽原深井秋水卒 八十二才

○七月廿六日池上平門を奉堂再建入佛供養 宝永年中焼亡の後  
 廿二世日没上人再真

○八月近在かあり ○音羽町九丁目青柳町カカ池取拂おの時際

春女あり 野とありて野や  
 音羽のころと也 ○十月十日湯崎天満文造管経又

○十二月十日狩野潤春福伝卒 あつち  
 秀哉

同九年 甲辰 己月望

正月十二日英一様卒 七十一才二年校義教中敷堂院不葬以釋世  
 ありては浮世のよさの色とくも有く必や不葬の月

○正月廿九日水町より火火事八夜月町本木換町まで焼了其

口山門焼了く十六の後済再建也 本換町火火  
 屋敷に在り

○為久保八幡を奉奉の災後修造済去花造不ありく

○甲府清城番始る○二月細詳 奉郷より火災築地近焼亡

○六月七日特許水取之伝率 六十才

○六月廿五日東郡毛除長廿敷十尺小堀りも毎一色目くろの  
尾の細きところ○八月清茂前札尻百九人小定くる

○十一月廿一日能入二世の立忘率 清系及種  
并葬儀

○寛和通曆刊行 系仲根  
之圭編

享保十年乙巳

二月十四日青山之保町より火災赤坂に谷市谷平込大塚多羽  
小石川道勝弱込谷平下管合村まで焼亡

○二月廿五日百羅得堂再建結半成就す 是家先和尚元祿の末より  
市井を勤化あり切せられり

○二月十九日能入爾后亭秋之率 神世  
見一巻のさめても色のうきつら

○五月十九日官儒新井白石先生率 六十九才名譽 字名義  
後学被譽七冲う種より葬

○六月廿二日古筆六代り青率 五十二才

○七月廿日津路陽信一寸見河東氏 五十二才天波屋屋平而本形七市陽信  
ち葬儀を以建てる碑五十二日と葬る難之

○九月二日冬島良辰後代忠死 大島兼の小うふりつるを良辰大島のり  
以後源川島江町小居一養校と号し

○十月大判出吹替元祿大判止忠盟多又出吹替あり

○今年長身の人志賀随氣 百七十  
八才 小石幼吉 百  
二才 俵後市吉 百十  
八才

石井幼吉 百二  
才 沼田伴虎 百一  
才 水野徳中 九  
十才 柴田十吉 九  
十才

中桑長多 九  
十才

同十一年 丙午

二月七日能入生玉琴丸率 号如系子段架押ト  
妻若七才小葬儀

○二月廿日能入家女率 六十二才利繫一と知護とらり  
吳若七才中念公第懐地小葬儀

○二月廿九日傷所去犯黙子孫自親居士と号し

○今年五穀豊饒あり○圓向院より桂系那赤尾天照山六吉寺

朝日如來宗帳○五月廣草小揚こあげの理を擧げ元々人の老母不仕く

斎持の事ありて慶賞をのぞく崎人村年山 紀伊并あり

○六月廿日郷人の間占連率六十二才男合款呈 廣草揚りたる事

○今年より十七年まで深川十萬坪小治子清淺あり元々元来五月あり 日におき清淺あり

○十一月十八日大道と友山翁尚齒令志安隨翁と藤六人の 翁令とらと云姓と事詳

享保十二年 丁未 正月

二月朔日夜五羊時光相東より病に死すの如く

○本撰町東女ら系たる協あり

○南田川本母も梅老九七五十年忌辰二月十五日 たり辰辰

○まき尾徳集おちが 細長村友山翁八十才 編翌年退老成る

○五月十二日能人宮野百里早雷六十二才多田中 別當東江小葉を 釋世の白 死て迄てとら 一月をたつとら

あつて明を多の 一 室唐七年七月六月お及豫ら 田舎全中松海波小治

○六月十旬より年別書取右非宮野周常陸必行波大村大郎 かんせ

花梅りあつて芝流群集一 万友家と彦結おをぬ 彦藤あり

搖の衣敷を忌く系流と程あり此年を信

○倉原定林年月日 未詳○十一月七日村林本町白子倉原三希養子 幼のあり

又四郎妻の事系る代忠八刑せ

○十二月十日表二番町よりかき統町永田町鹿の宮虎の池門久保 町あり

町ありこ中橋上も表門表ありまて焼亡是より統町より通り

此代と成る○十二月十日能人志邑佳凡年四十四才 約止 大徳と事詳



○十二月由桑名川堤廣うるふ由坂小石川小日向辺大石の所新土坑  
自中あつぬりたり

○九月晦の儘作降後好義齋率 名邦達  
泉井寺小集

○十月に日蓮谷日守寺小鬼子母作像を安置す 日法上人他深念  
役人藤田末信末

○江戸社社志記刊行 荒井志敷  
編

享保十三年己酉 九月間

○八月廿七日國學若松跡於光海率 名臣興務辰内七十一才  
青山玉窓寺小集

○二月十六日版田町坂上武家方より火入 合田宗友  
内庭資より 田安内門并於燒の

取用池小成る ○五月交込國の鄭大威より 合田宗友  
内庭資より 田安内門并於燒の

取用池 去年六月長湯(北社二匹を海を北の長湯お終て歸る今年に月社二匹を大坂へ  
牽来り同日系於(入大内)牽く五月廿五日に於て終て歸る今年に月社二匹を大坂へ  
牽来り同日系於(入大内)牽く五月廿五日に於て終て歸る今年に月社二匹を大坂へ  
牽来り同日系於(入大内)牽く五月廿五日に於て終て歸る今年に月社二匹を大坂へ

小集りて終る今の中社室家末もありこの所次第あり  
備神家の住持あまのありし中社小集りて終る今の中社室家末もありこの所次第あり

作の業さうけしこのまのやこ 鳥丸  
老業に

この所中村三迫り編の末の首自林屋より多首珍記又編者西家志たどりやま  
を移せり江戸の能人仙雀より白ふ 今やひくはまの種神くこつむり

○十一月廿二日書お後於保考率 号警彦翁 孫清助  
甚務彦徳雲と小集り

同十五年 庚戌

○正月江戸町火消に十七組を十組小定する 目下お暴の弱形あり纏の吹流  
止ておとんを討つこの附小組に十

七組あり後小本組を来ては十八組と成小集りて  
小集りて大纏小まこひともあり 諸節節たり

○二月十八日原見十方庵の事自休終 今十才本は行町  
流光と小集り

○二月本醫室證廿五冊刊行

○二月本坂水川河神合井巻(後)は社法建をあり廿六の百延云有

○今國八幡文殿損ふと川て春多七上家と信りて五月十五日より

日取五日の乃地月おれて勅化能具江 横濱金三より一五米 一人分銀二ありあり

○五月金札銀札先年の通り通用済免

○六月十六日夏惣軒志賀随道新卒 百八十三天徳寺 中野町院小卒

○八月廿九日大風お海川世三乃重吹浪も築地大なるあり

○十月鶴うづりこり小渡を中も鼻より上へ急ぐあり

○冬より翌年まで小より麻疹流行 身うち二百牛 洞をぬく

○是より那見沼こなま不新田を築く 去るは申年中終るまで那見沼を新田不新田と 一はる田築かろ海友清といふ老を撰り ありよりは田を合せしり今年も又 命ありて新田築かろ海友清といふ老を撰り 魚の田を築くよりは那見沼の跡川不新田を合せしり今年も又 命ありて新田築かろ海友清といふ老を撰り 是より那見沼の二取の内ありて西の地を合ひはる新田川の辺も邸地を合ひて凡派川運 漕と申す命合せしり今年も又 命ありて新田築かろ海友清といふ老を撰り 与清是也 あり

享保十六年 辛寅

正月八日狩野宗川古信卒 二十六才

○二月十五日福中太風年中刻目自甚武家方よりお火より辺のりて

不動堂も焼失関にありて町改代町辺中里赤松の社を武家方組

取合身込市谷辺邊坂上下山崎堀まで於焼同時魏町二十日燒

番町一飛火半焼山門亦より山崎堀焼くは赤松因縁の邊に於

廣藤邸虎清川幸橋山門焼失岩社跡り久保町甚は通町筋并

那宮本の旗地海辺におり暮六時終る武家町倉と社敷一丸

必焼あり ○五月廿一日官儀安見焼山卒 名元及孫文平 麻布若松と葬

○七月十二日家入野田辨翁卒 名久忠 極楽あり 菩提寺子孫葬

○八月十一日夜より十二日迄は時まで大風十七日夜并九月二日大

風あり ○九月十七日狩野宗川の憲信卒 二十才

○十月十二日蓮上人百五十年忌法會あり

○十月十二日耳落降（録後八二本） ○十二月十九日儒師右田希賢卒

義教子  
小華也

享保十七年壬子 五月

正月十二日儒師矢野極齋卒 名義子孫理平  
所著書小華

○二月十二日忠定宮下青松寺より忠定新橋と焼同日小石川白山より火松平甲お彦邸おひりり

○二月増上寺柵門内子聖指規勅請

○二月廿八日清原宗平統門前より忠定清原宗平岩辺守社町方五燒亡 以時清原宗平統門前より忠定清原宗平岩辺守社町方五燒亡  
町屋を 百十と進田系より智地を下りぬ

○非田郡非橋門再建立 町より非田郡入利の二分一を見送り合三百四と  
収むを服会家町人より寄附をりて建立

○浅草寺命院より上及新田医事職書宗師冥帳

○岩船地院より同多中冥帳 ○天下肌腫疫癘行り

○六月十二日頼房松凡卒 八十六才再年教中  
法持寺小華 ○七月廿一日儒師平野

金華卒 已十五才林源宮馬の為に小華  
華老も小華の文法先代と傳

○冬流翰名人藤平光寿卒 八十才非田小居せり翰の空とりの小石川味を丹練  
より近世の風更ふりて今も老ある流方をみる

○世の流るりり ○昔くお流流 形見入る法入編寫中より書安  
義教の以り世上の風俗を述ぶる也

同十八年 癸丑

○江戸系酒林信元日暮春里流防養

○お狂入て十二景のつわり 十二系六 後波系流 後父遠新 流筆川夕照 権重村  
田家 玉子源林 平塚甚廣 翁彦彦秋月

藤井夜鳥 黒髪山抄堂 忠清川瑞帆  
中里龜境 西京晴嵐